



スポーツドクターの仕事 ～オリンピックの舞台裏～ その①



【はじめに】

一年延期、新型コロナ蔓延真っ盛りで緊急事態宣言下という異例づくめではありましたが、自国開催の東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会が終了しました。開催に賛否はありましたが、人生を賭けて準備してきた選手たちを支える立場としては開催できて心から良かったと思います。

スポーツ医学というと、スポーツ選手への迅速な診断、治療、リハビリによる早期復帰 = “マイナスを早く戻す” のみを連想しがちですが、メディカルチェック、選手・指導者への教育などによる障害の予防 = “マイナスをなくす”、適切なトレーニングやフォームの獲得などによる競技力の向上 = “プラスをつくる” ところまで深く関わるのが大事になります。

今回は東京 2020 オリンピックで私が行なったテニス競技におけるチームサポートを通じてスポーツドクターがどのように競技、選手たちをサポートしているかについてお話しします。

【チームドクターの役割】

チームドクターの仕事は競技の種目特異性によって様々ですが、選手をベストの状態フィールドやコートに送り出し、試合でベストパフォーマンスを発揮できるようにサポートすることです。

テニスではグランドスラムなどのツアー大会とは別に、年間 4 戦程度行われる国別対抗戦やオリンピックなどで招集されるナショナルチームでの活動が主となります。その内容はメディカルチェック、傷害・疾病の治療と予防、ドーピング教育と検査への同伴、大会現地の医療体制や衛生環境のチェックとそれに応じた食事やメディカルキットの準備など多岐にわたります。

チームドクター派遣がスタートした約 15 年前は、召集された時だけ選手と顔を合わせるので信頼関係が希薄でした。そこで長期間の遠征で疲労、慢性

的な故障を抱えていることが多い選手たち（平均的選手で 1 年に地球を 3 周するくらい世界を転戦する！）への魅力あるサポートの一環とすべく、長期的視点に立った治療、強化を召集中に立案し、トレーナーとのサポートチームを作り、いつでもアクセスできる動画を駆使したオンライン診療など工夫し、ツアーを転戦している期間中も継続的な面でのフォローができるべくメディカルサポートを深化させていきました。今では地球の裏側からでも選手たちからの相談が来るようになっています。



オリンピック日本代表チーム 上段右から 2 番目が筆者

第 143 号では、真夏の過酷な環境下で戦う選手たちのサポートについてお話しします

～第 143 号へ続く～

一 筆者紹介一

みたに げんや
三谷 玄弥



1993 年 東海大学医学部卒業 医学博士
東海大学医学部医学科外科学系整形外科学 准教授
東海大学医学部附属大磯病院 整形外科 医長
筆者プロフィールの詳細は、
次号で紹介いたします